

ライトアップされたまちかど郷土館  
今年11月、建物のデザインが優れているとして  
国の登録有形文化財に登録されることになりました。

総社宮の門前町として栄え、その歴史を今に伝える総社商店街。今は、時代の流れの中で昔のような活気は失われています。かつての松山往來の町筋には、今も往時の繁栄をしのばせる町家風の建物などが点在します。こうした古い街並みや、趣のある裏路地の景観を生かして、活気のある街づくりはできないのか。歴史ある総社商店街を未来に伝えるため、自らにぎわいを作り出そうという新たな取り組みが、商店街に活気を呼び戻しました。

## 栄枯盛衰

総社商店街は、古くから総社宮の門前町として形成され、近世中期の元禄（1688年～1704年）のころから、松山往來の宿駅と商業村落として急速に繁栄しました。寛延3年（1750年）の「八田部村明細帳案」には、豪商・富商などを含めて約70軒の商人が記されています。町筋の東から宮本町、栄町、本町、田町の商店街にこれらの商家が軒を連ね、市場には近くの村里から人と物が集まって、にぎわいを見せていました。また、各地から詩や書、絵を書く人たちがこの地を訪れ、文化の花を咲かせました。町の経済力は、一時は倉敷をしのぐほどの勢いであったと伝え

られていました。平安時代末期、備中国府の周辺に、備中国内のすべての神社を1か所に集めて総社が建てられ、この総社が後に総社宮となり、付近の地名として呼ばれるようになったということです。その後、明治8年に総社村として「総社」の名称が使用され、現在は総社市の市名になっています。



今年の総社宮秋季大祭。きらびやかな衣装で舞う稚児の姿に、商店街は華やかな雰囲気になります

られ、文化も経済も共に栄えたのが総社の商店街でした。

## 総社

この辺りは、仁徳天皇の皇妃八田部皇女の名代の地として、八田部と呼ば

昭和30年ごろの、総社商店街のにぎわいを懐かしむ人は多くいます。当時、商店街に行けば生活に必要な大抵の物は手に入れることができ、映画館や銀行、病院などもあり、市民の毎日の生活を支えてくれていました。またこのころには土曜夜市も開催され、大勢の人出でにぎわっていました。しかし、その後の車社会の到来や、商業形態の変化による郊外型の商業施設の進出などで、商店街は急速に活気を失うことになりました。今は、シャッターを下ろした空き店舗が目立ちます。商店街の抱えるこうした問題は全国各地で見られます。そこで今年、「このままでは、さみしい。何とか総社商店街が息を吹き返さないか」こうした思いをもった市民が立ち上がりました。

※名代り大化前代、皇室に物資を貢納した民の集団



栄町付近の昔の街並み



夜市でにぎわう昭和30年代の総社商店街